

育児期の母親の母親役割受容と家族関係に関する研究

—アイデンティティ葛藤と統合の視点から—

分担研究者 岡 本 祐 子
(広島大学教育学部助教授)

研究要旨 幼児の健康な情緒発達にとって、家庭が心理・社会的に健全な保育環境であることは、必須の要件である。しかしながら、今日、母親役割の受容や育児への積極的関与ができない母親の増加が指摘されている。その背景の一つには、幼児をもつ母親のアイデンティティ葛藤があると考えられる。本研究では、幼児をもつ母親の母親役割受容を、個としてのアイデンティティと母親アイデンティティの統合・葛藤という視点からとらえ、母親役割受容と育児への積極的関与と家族関係の関連性について検討した。3～5歳の幼児をもつ147名の母親を対象に質問紙調査を行った。対象者は、Ⅰ統合型、Ⅱ伝統的母親型、Ⅲ独立的母親型、Ⅳ未熟型の4タイプの分類された。主要な結果は以下のとおりである。

1) Ⅰ統合型の母親は、Ⅳ未熟型の母親よりも家庭生活によく満足しており、Ⅱ伝統的母親型の母親よりも夫からよく理解・受容されていると認知していた。

2) 家族とのかかわり方や家族の認知のし方は、4タイプ間で著しい相違が見られた。Ⅰ統合型が、夫を最も肯定的に受けとめており、育児や家族に対する積極的関与が最もよくできていた。Ⅳ未熟型は、夫・子供に対して拒否的であったり、積極的関与が不十分である者が最も多かった。

これらの結果を総合して、幼児をもつ母親の母親役割受容には、家族とのかかわり方、特に夫との関係が重要な意味をもっていること、母親役割を受容し、積極的に育児に関与していくためには、夫が妻の育児に関心を示し、心理的にサポートしていくことが重要であることが示唆された。

本研究の成果は、今後、育児への積極的関与を促進する家族環境に関する基礎資料として、母親・父親を対象とした啓蒙・教育へ活用が可能である。将来的には、父親・母親が育児に等しく関心と責任をもつ家庭経営実践へ発展させたい。

■ 研究目的

幼児の健康な情緒発達にとって、家庭が心理・社会的に健全な保育環境であることは、必須の要件である。しかしながら、今日、母親役割の受容や育児への積極的関与ができない母親の増加が指摘されている。その背景の一つには、幼児をもつ母親のアイデンティティ葛藤があると考えられる。そこで本研究では、幼児を持つ母親の母親役割受容を、個としてのアイデンティティ、母親アイデンティティの葛藤と統合という視点からとらえ、①育児期の女性のアイデンティティ葛藤と統合の状態像について検討し、②育児期の女性における母親役割受容と家族関係に見られる特徴の関連性について考察することを目的とした。

■ 研究方法

1. 調査対象者

H市内のA幼稚園児の母親147名(平均年齢 33.2歳、83.0%が核家族、76.6%が専業主婦)。

2. 手続き

①アイデンティティ尺度(Rasmussen,1964)、②母性理念質問紙(花沢,1992)、③家庭生活、夫との関係、夫の育児・家事への協力などに関する5ポイント・スケールの質問4項目、および自分の人生、生きがい、子育て、夫との関係などに関する文章完成法(SCT)6項目、からなる質問紙調査を行った。

■ 結果および考察

1. 母親役割受容から見たアイデンティティ様態の定義と分類

本研究では、育児期の女性のアイデンティティ様

態を①個としてのアイデンティティの達成度と②母性意識の高さの2次元でとらえ、両者が個々人の中でどのように統合、あるいは葛藤しているかという視点から、4タイプを想定した：Ⅰ統合型(両者ともよく達成・獲得されている)、Ⅱ伝統的母親型(個としてのアイデンティティは低い、母性意識は高い)、Ⅲ独立的母親型(個としてのアイデンティティは高い、母性意識は低い)、Ⅳ未熟型(両者ともに低い)。

個としてのアイデンティティ達成度は、Rasmussenのアイデンティティ尺度得点の平均値36.56を基準に、37点以上を「高」、36点以下を「低」と見なした。母性意識の高さは、花沢の母性理念質問紙の得点の平均値93.85を基準に、94点以上を「高」、93点以下を「低」と見なした。

2. 母性意識の特徴

母性意識は、母性理念質問紙に対する反応をもとに検討した。母性理念得点は、すべての項目においてⅠ統合型、Ⅱ伝統的母親型は、Ⅲ独立的母親型、Ⅳ未熟型よりも高得点を示した。この結果は、これら4タイプの定義から見て妥当なものである。

また各々の項目の得点を検討すると、4タイプ共通の特徴として、次のような点が見出された。全体的に肯定項目のうち、「子供を産んで育てるのは社会に対する女の務めである」(No.10)、「育児は女に向いている仕事であるからするのが自然である」(No.13)、「子供を産んで育てなければ女に生まれた

甲斐がない」(No.16)、「育児に専念したいというのが女の本音である」(No.26)や、否定項目のうち「育児は妻だけでなく夫もするべきである」(No.18)に対しては特に得点が低く、全対象者の平均値は、3.00未満の値を示した。これらの結果は、従来の母性理念、すなわち女性であることは即、よい母親であるべきであるという考え方を否定する傾向や、育児は女性だけがするものではないという現代女性の意識を明確に表している。このような現代女性の母性意識の特徴が4タイプに共通に反映されていることは注目すべきであろう。

3. 各タイプに見られる家庭生活への満足感・夫婦関係の関連性

家庭生活の満足感、夫の妻への理解の程度、夫の家事・育児への協力の程度およびそれへの満足感に関する項目は、それぞれ5ポイント・スケールで評定させた。それぞれのタイプの得点は、表1に示した。分散分析の結果、家庭生活の満足感は、Ⅰ統合型がⅣ未熟型よりも、夫の妻への理解の程度は、Ⅰ統合型がⅡ伝統的母親型よりも有意に高い得点を示した($F(3,143)=3.50, P<.05$; $F(3,143)=3.77, P<.05$)。しかし、夫の家事・育児への協力の程度およびそれへの満足感には有意差は見られなかった。

これらの結果は、Ⅰ統合型は他のタイプに比べて家庭生活への満足感が高いことや、夫からの理解の程度も高いと認知していることを示唆している。すなわち、家事・育児に対する夫の実際の協力という

表1. 各タイプ別に見た家庭生活、夫の理解、家事・育児に対する協力への満足感

タイプ	人数	項目			
		家庭生活の満足感	夫の妻への理解の程度	夫の家事・育児の協力度	夫の家事・育児の協力に対する満足感
Ⅰ 総合型	M	4.32	4.08	3.80	3.76
	SD	0.70	0.85	1.11	1.07
Ⅱ 伝統的母親型	M	3.85	3.45	3.40	3.34
	SD	0.77	0.78	1.11	1.05
Ⅲ 独立的母親型	M	3.93	3.73	3.66	3.66
	SD	1.04	0.98	1.37	1.32
Ⅳ 未熟型	M	3.74	3.57	3.85	3.34
	SD	1.01	1.03	1.16	1.23
Total	M	3.99	3.74	3.69	3.54
	SD	0.89	0.93	1.18	1.16
有意差検定		I vs. IV *	I vs. II *	n.s.	n.s.

* $p<0.05$.

次元ではなく、より人格的な次元において夫から理解されていると認識できることが、育児期の女性を支えるものであると推察される。夫が妻の生き方を理解し、心理的に支えていくことが、育児期の女性にとって母親役割を受容し、アイデンティティを統

合させていくことにつながると考えられる。

4. 文章完成法(SCT)の反応内容に見られた各タイプの特徴(表2、3)

SCT 6項目に対する反応内容は、筆者の作成した

表2. SCT反応内容の分類の視点・基準

(単位：%)

SCT項目	分類の視点・基準	反応例	I 統合型	II 伝統的 母親型	III 独立的 母親型	IV 未熟型
私の人生	Highest level 人生を肯定的、積極的にとらえ、家族との生活に幸福感、充足感を体験している。	H ・夫とともに歩みながら、自分自身も成長していくこと。 ・悔いのないように頑張りたい。	66.0	48.6	40.0	28.6
	Lowest level 人生を否定的、悲観的にとらえている。または人生に対する漠然感が特徴的である。	M ・こんなものかなと思う。 ・子育てだけで終わりにたくない。 ・私のもの。 L ・こんなはずではなかった。 ・どこでまちがったか。 ・この先、どうなるのだろう。	29.8	42.9	43.3	42.9
			4.2	8.5	16.7	28.5
私の生きがい	Highest level 生きがい感をもっていることが、明確に表現されている。生きがいについての具体的な記述がある。	H ・家族の幸せであり、仕事の充実である。 ・私を必要とする人のために頑張ること。 M ・これから見つけたい。 ・子供でもあるが、別のこともしたい。	76.6	54.3	46.7	31.4
	Lowest level 生きがいがない。または生きがいについて考えたこともない。	L ・まだ見つかっていない。 ・何だろう。 ・考えたことがない。	0.0	17.1	26.6	37.2
子供を育てることは私にとって	Highest level 育児に対する積極的な姿勢が見られ、育児を自分自身の成長と関連させてとらえている。	H ・人生の課題であり、喜びでもある。 ・人生最大の仕事であり、私を大人に成長させてくれる。	80.9	68.6	46.7	31.4
	Lowest level 育児に対する否定的、消極的な姿勢が特徴的である。育児を義務としてとらえている。	M ・あたりまえのことである。 ・楽しさ3割、試練7割である。 L ・かなり大変な仕事である。 ・与えられた試練である。 ・義務である。	17.0	28.6	30.0	31.4
			2.1	2.8	23.3	37.2

表2. (つづき)

SCT 項目	分類の視点・基準	反応例	I	II	III	IV
			統合型	伝統的 母親型	独立的 母親型	未熟型
子供がいなかったら	Highest level 子育てに情緒的に積極的関与し、自分自身も成長したという親子の相互交流を示す記述内容。	H ・私の人生は今より淋しいものになっていただろう。 ・人の気持ちや痛みをわからない小さな人間になっていただろう。	55.3	68.6	36.7	48.6
	Lowest level 子供の存在から全く分離した子供とは無関係の生活の記述内容。	M ・体型もくずれず手の指も美しいままであっただろう。 ・淋しかったかもしれないが、気楽でよかったかもしれない。	17.0	14.3	23.3	14.3
		L ・別の楽しみをもっている。 ・もう少し自由に行動できた。 ・仕事を充実させていただろう。	27.7	17.1	40.0	37.1
私が母であるということ	Highest level 母親としての自分を積極的に受容し、親としての役割を一生懸命果たそうとする姿勢が見られる。	H ・子供たちは気にいらないくかもしれないが、一生懸命やっている。 ・子供たちの最強の友人になりたい。	53.2	45.7	36.7	28.6
	Lowest level 母親としての自分を受容できていない。母親役割に対する否定的、消極的な姿勢が特徴的である。	M ・私の責務である。 ・女に生まれたのだから、当然である。 ・事実である。	34.0	28.6	30.0	31.4
		L ・未だに信じられない。 ・ほとんど罪である。 ・何かのまちがいはないか。 ・自分自身たよりない。	12.8	25.7	33.3	40.0
私にとって夫は	Highest level 夫を信頼し、夫婦としての相互交流が見られる記述内容。	H ・何でも話し合って共に生きていく相手である。 ・心の支えであり、最愛の人。 ・人生の最良のパートナーである。	80.9	62.9	53.3	43.0
	Lowest level 夫を拒否、または夫と理解しあえていないことを示唆する記述内容。	M ・必要である。 ・子供の父親。 ・空気のようなもの。	19.1	31.4	26.7	34.3
		L ・他人である。 ・暴君である。 ・あくまで子供の父親にすぎない。	0.0	5.7	20.0	22.7

H: high level, M: middle level, L: low level.

マニュアルに従って分析・検討した。SCTの反応内容は、各タイプによって著しい相違が見られた。

I 統合型は、自分の人生と育児の両者を意義あるものとして肯定的に受けとめ、主体的、積極的に関与していることが特徴的であった。さらに自分の人生と育児が調和しており、育児によって自分自身が成長してきたことや、育児が生きがいになっていることが明確に意識されていた。また、SCTの各刺激項目に対して、家族に対する記述が多く、夫を信頼し、高く評価していることが推察された。

II 伝統的母親型は、自分の人生に対しては肯定的で満足しているが、I型と比較すると、現在の生活や将来に対する主体性はそれほど高くない。また、自分の人生に対する明確な意識や展望が乏しいことが特徴的であった。育児に対しては、子供の気持ちを大切にすよい母親であろうとする姿勢が4

タイプの中で最も強く、自己意識の中に占める子供の存在の大きさがうかがわれた。育児に対してはアンビバレントな反応も多いが、このタイプのアンビバレントな感情は、「大変だけれど楽しいもの」「夢いっぱいだが悩むことも多い」などの反応に示されているように、子育てにしっかりと関与し、積極的にとりくんでいることから体験されていた。これは、III 独立的母親型の、「子育ては苦楽に満ちているが生きがいではない」というような、育児への関与の浅さからくる気持ちの揺れとは異なるものであろう。II 伝統的母親型の夫に対する意識は肯定的であるが、子供の父親あるいは、いることがあたりまえの家族員としてとらえており、1人の人間としての受けとめ方は見られなかった。

独立的母親型は、上記のI・II型とは異なり、個としての生き方が前面に出ていることが特徴的で

表3. タイプ別に見たSCT反応の特徴

	「私の人生」	「私の生きがい」	「子供を育てること は私にとって」	「子供がいなかったら」	「私が母であるということ」	「私にとって夫は」
I 統合型	「温かな家族に包まれ幸せを毎日かみしめている」「今も昔も家族や友人に支えられている」など、幸福感を感じている反応が多く、「夢に自分がどれだけ近づけるか試されている」など、前向きで積極的な姿勢が特徴的である。	「今のところ子供だが、「これから何か探していく」など、子育てがすべてではないという気持ちが推察される反応や家族を思いやる反応が多い。反応内容のほとんどは子供や家族に関するものであり、I群の対象者はすべて生きがいをもっている。	「自分自身の成長」「プラスの面が多い」など育児を自分自身を向上させていけるものとしてとらえている。また「一番大事なこと」「生きがい」「楽しい」など積極的な姿勢で育児に臨んでいる。「かなり大変」といった否定的な反応は1名のみである。	「今の自分はある得ない」「心の成長はなかった」など育児による自分自身の成長をうかがわせる反応が多い。一方、「いないりの人生を歩む」など、子供がすべてではないと思われる反応や「もっと自由な生活ができる」など母親役割を否定するような反応も少数見られた。	全体的に「良き母になるよう努力する」「責任をもちたい」など、母としての自分を積極的に受け入れ、高めていこうとし、「幸せなこと」「感謝したい」と感じているが、「今だに信じられない」「不思議」という反応も少数見られた。	「人生の良きパートナー」「大切な存在」「良き理解者」「心の支え」として夫を信頼し、高く評価していることが推察される。
II 伝統的母親型	「これで十分」「平凡で平和」など現状に満足している反応がほとんどである。また「家族のために働くこと」「子供のためにある」など自分を犠牲にしていると感じられる反応も見られた。	「子供の成長」としているが、I群に比べて今後、1人の人間としての生きがいを見つけたいこうと感じさせるものが少ない。また「何だろう」「まだ見つからない」「考えたことがない」などの反応も見られた。	「大変だけれど楽しいもの」「夢いっぱいだが悩むことも多い」などI群にはあまり見られなかったアンビバレントな記述が多い。「自分自身の成長」とするものも見られた。	「淋しい」という反応がほとんどである。「それなりに楽しく暮らす」などの反応はわずかであり、子供の存在の大きさが推察される。自分自身の成長や母親役割を否定するような反応は全く見られない。	「子供にとって良き母であるかどうかはわからないが、がんばる」「子供たちによかったと思ってもらえれば」など、子供の気持を優先する反応が多い。	「良いパートナー」「一番の理解者」「頼りにしている人」であるが、「子供の父親」というI群には見られなかったとらえ方をしている。また「空気みたいな人」「こんなものかな」など夫の存在が意識されていないと感じられる反応も見られた。

表3. (つづき)

	「私の人生」	「私の生きがい」	「子供を育てることとは私にとって」	「子供がいなかったら」	「私が母であるということ」	「私にとって夫は」
Ⅲ 独立 的母 親型	I・Ⅱ群には見られない「私のもの」という反応がかなり多い。「まだまだこれから」「充実した日々を送っていきたい」と人生を前向きに考えてはいるが、家族とともに歩んでいくこととする姿勢は感じられない。	「子育ては苦楽に満ちているが生きがいではない」など、家族に関する記述は少ない。人生に対する積極的な姿勢が見られる一方で、「何だろう」「今はない」という漠然とした反応もある。	「自分自身の成長」とするものと、「義務の一つ」「時々苦痛になる」など育児を否定的・消極的にとらえるものに分かれている。I・Ⅱ群に比べ「楽しい」「生きがい」という反応はかなり少なく、育児に対する積極性は見られない。	「仕事をしていた」という反応が圧倒的に多い。また「淋しいかもしれないが、楽でよかったかも」というアンビバレントな反応も多く、母親役割を受容しきれないことが推察される。	「不思議」という記述が最も多く、「あまり思っていない」「時に煩わしいこともあるなど母親としての肯定的感情は少ない。よい母親でありたいという積極性は見られない。	「良きパートナー」とする記述はわずかであり、「ともに生きる相手であってほしい」「共同生活者」「ふつうの人」「同志である」など他群に比べて独立した生活者として意識している側面が見られる。
V 未 熟 型	「どこでまちがったのか」「思いどおりにならない」など現状に対する不満が感じられる。また「この先どうなるの」「これからは一番きつい」など不安で悲観的な反応も目立つ。Ⅲ群と同様、子供や家族に関する記述はほとんどなく、自分に対しても「何だろう」「わからない」など漠然感が特徴的である。	「何だろう」という反応が最も多い。「子供の成長」とする者も他群に比べて僅かである。現時点で生きがいを見出せていないことが推察される。	「難しい」「重荷」「試練」など育児に対して否定的、消極的であり、「仕事」としてとらえている者も見られる。Ⅲ群と同様、「楽しい」「生きがい」という反応は少ない。	「淋しい」「毎日が退屈でつまらない」という反応も見られるが、「遊んでいるかも」「もう少し自由な行動ができた」「と思うことがあ」など母親役割を否定する反応がI・Ⅱ群に比較して多く見られた。	「不思議」「ほとんど罪」「まちがっている」「不徳のいたすところ」など他群に比べて母親としての自分を受容できていない反応が最も多い。「事実」「一生変わらない」という事実を述べているだけの反応も見られた。	「良きパートナー」という反応が多い反面、「いなくてもよい」「永遠の大きな謎」など、否定的な内容や理解し合えていないことが推察される反応も見られた。

あった。母親である自分は「不思議」という反応が象徴的に示しているように、母親としてのアイデンティティが自己にしっかりと定着し受容されていないことが推察された。夫に対しても対等で、独立した生活者として意識されていた。

Ⅳ未熟型は、4タイプの中で否定的な意味合いの反応が最も多く見られ、不適応のタイプであると考えられる。自分の人生に対しても不満や漠然感が強く、将来展望もかなり悲観的であった。育児に対しても否定的、消極的であり、母親としての自分を受容できていない反応が多く見られた。夫に対しても拒否的であったり理解し合えていないことが推察された。このように、各タイプのSCT反応の内容は、本研究で設定した4タイプの定義を明確に裏づけるものであった。本研究によって示唆されたように、子供をもつすべての女性が母親であることを受

容し、母親である自分を自己の生き方の中に統合しているわけではない。特にⅣ未熟型は、母親であることへの不適格感や母親役割を否定する傾向が強いこと、同時に自分の人生に対する不満や不適応感、漠然感も高いことが示唆された。また、Ⅲ独立の母親型は、育児に対して否定的、消極的であり、母親であることにアンビバレントな感情が強く、葛藤状況にあることが推察された。Ⅰ統合型は、個としての自己と母親としての自己が調和し統合されており、4タイプの中で最も成熟したアイデンティティを達成していると考えられる。

これら4タイプの女性の家族との関係を分析すると、Ⅰ統合型が夫を最も積極的、肯定的に受けとめており、家族に対する積極的な関与がしっかりとできていることが示唆された。Ⅱ伝統的母親型も、家族や夫に対する意識は肯定的であるが、Ⅰ型に比

べて主体性の程度は低い。Ⅲ独立的母親型は、夫と対等であることが意識されており、自立性が感じられるが、子供に対する姿勢は、否定的、消極的な面が多い。またⅣ未熟型は、夫や子供に対して拒否的であったり、積極的関与が不十分であることが示唆された。

■ 結論および今後の課題

幼児をもつ母親の母親役割受容には、家族とのかわり方、特に夫との関係が重要な意味をもっている。母親役割を受容し、積極的に育児に関与していくためには、夫が妻の育児に関心を示し、心理的にサポートしていくことが重要である。



研究要旨 幼児の健康な情緒発達にとって、家庭が心理・社会的に健全な保育環境であることは、必須の要件である。しかしながら、今日、母親役割の受容や育児への積極的関与ができない母親の増加が指摘されている。その背景の一つには、幼児をもつ母親のアイデンティティ葛藤があると考えられる。本研究では、幼児をもつ母親の母親役割受容を、個としてのアイデンティティと母親アイデンティティの統合・葛藤という視点からとらえ、母親役割受容と育児への積極的関与と家族関係の関連性について検討した。3～5歳の幼児をもつ147名の母親を対象に質問紙調査を行った。対象者は、1 統合型、H 伝統的母親型、m 独立的母親型、IV 未熟型の4タイプの分類された。主要な結果は以下のとおりである。

1)1 統合型の母親は、IV 未熟型の母親よりも家庭生活によく満足しており、n 伝統的母親型の母親よりも夫からよく理解・受容されていると認知していた。

2)家族とのかかわり方や家族の認知のし方は、4タイプ間で著しい相違が見られた。1 統合型が、夫を最も肯定的に受けとめており、育児や家族に対する積極的関与が最もよくできていた。IV 未熟型は、夫・子供に対して拒否的であったり、積極的関与が不十分である者が最も多かった。

これらの結果を総合して、幼児をもつ母親の母親役割受容には、家族とのかかわり方、特に夫との関係が重要な意味をもっていること、母親役割を受容し、積極的に育児に関与していくためには、夫が妻の育児に関心を示し、心理的にサポートしていくことが重要であることが示唆された。

本研究の成果は、今後、育児への積極的関与を促進する家族環境に関する基礎資料として、母親・父親を対象とした啓蒙・教育へ活用が可能である。将来的には、父親・母親が育児に等しく関心と責任をもつ家庭経営実践へ発展させたい。